

Title	中国人日本語教師による授受補助動詞の指導方略について
Author(s)	孫, 成志
Citation	日本語・日本文化研究. 23 P.48-P.59
Issue Date	2013-12-20
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/26919
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

中国人日本語教師による授受補助動詞の指導方略について

孫 成志

1. はじめに

行為の授受を表す授受補助動詞（「～テアゲル」「～テクレル」「～テモラウ」¹の3系列7形式）は、日本語学習者にとって習得が困難な文法項目の一つである。堀口（1983）では、日常生活の場面において、(1)のような助詞の誤用や授受補助動詞間の混用などによる文法上の誤りのほか、(2)のように文法的には正しいが、授受表現を使用すべきところで使っていない「脱落」や、使用すべきでないところで使ってしまう「過剰使用」などといった語用論的な誤りも目立つと述べている。

- (1) a. 日本語がまだ足りない私の説明が、案外に学生によくわかってくれたようだ。
- b. カメラを借りたいなら、李さんに聞いてください。きっと貸してあげるでしょう。
- (2) a. 先輩は東京の色々なところを案内しました。楽しかったです。
- b. 先生は韓国語がわからなければ、私が訳してあげます。（下線は筆者）（堀口1983）

これまでに日本語学習者による授受補助動詞の使用実態や習得順序に関する調査研究は数多く行われてきたが、日本語教師がいかに授受補助動詞を指導しているのか、その実情が検討されたことは殆どない。

また、日中対照研究の視点から言えば、中国語には直接「～テモラウ」に対応する表現は存在しなく、授与の意味を表す「～テアゲル」と「～テモラウ」の2系列は「V+給」のみとなっている（井上 2011）。これらの相違は、どのように実際の学習指導に生かすことができるだろうか。

そこで、本稿では、授受補助動詞の使用と習得にかかわる要因を検討するための基礎研究として、中国語を母語とする日本語の教師が、いかに日本語の授受補助動詞を導入・指導しているのか、いわば授受補助動詞の指導方略を明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要

<調査協力者>

本稿では、中国のAとB大学の外国語学部日本語学科で大学生らに日本語を教えている中国人教師（以下、CJT）6名から調査協力を得た（表1）。調査協力者は全員日本語教育及び関連分野での修士号またはそれ以上の学位を取得しており、日本語の授受表現の指導が必要となる初中級クラスを担当したことがある。また、教授歴（平均8.2年間）が長いため、「総合日本語（文法中心の授業）」や「聴解」、「読解」、「作文」といった4技能に関

する基礎科目を担当したことがあるという。なお、同一の日本語の教科書を使用した場合があるものの、授受補助動詞の指導方法に関する打ち合わせを行ったことはないという。

表 1. 調査協力者の情報 (2013年6月現在)

NO	性別	年齢	専門	教授歴	訪日歴
1	男	38	日本語教育学	10年	2.5年
2	女	40	社会言語学	15年	6年
3	女	35	近代文学	8年	4年
4	男	33	日本語学	6年	2年
5	女	34	日本語教育学	7年	4年
6	女	33	外国語教育	3年	6年
平均		35.5	—	8.2年	4.1年

<調査方法と内容>

調査は、筆者と調査協力者の一対一または電話による半構造化インタビューを中国語で実施した。質問項目は下記の5つである。1人で大体20分～30分かかった。インタビューの内容は調査協力者の承諾を得て録音し、分析のデータとした。

- 1) 「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」「～てくれる」「～てくださる」「～てもらう」「～ていただく」といった7つの授受補助動詞は、どのような順番で教えているのか。
- 2) 授受補助動詞間の相違（「～てくれる」と「～てくださる」といった系列内の相違と、「～テクレル」と「～テモラウ」といった系列間の相違）について、どのように説明しているのか。
- 3) 授受補助動詞の用法と意味機能を説明するとき、どのような例文、または「場面」を学生たちに提示しているのか。
- 4) どのような中国語訳を与えているのか。
- 5) 「恩恵・利益」以外の意味を持つ授受補助動詞は、授業内容として教えているのか。

<調査期間>

調査期間は、2013年6月～7月である。なお、上述のインタビュー調査の質問項目に関する確認も兼ね、5月末に日本に留学中の中国人日本語教師2人（男女一人ずつ）を対象にパイロット調査を実施した。

3. 調査結果と考察

以下では、6名の中国人日本語教師を対象とするインタビュー調査のデータから、上記の1)～5)の質問の順で、調査結果のまとめ及びその考察を行う。

3.1 教える順序について

文型表現の指導順序は、日本語の教科書の提出順序に深く関わっているため、まず、今回のCJTが使用した4冊の教科書²における授受補助動詞の提出順序を調べてみる。

表2に示すように、日本語の教科書における授受補助動詞の提出順序に関しては、①7形式の授受補助動詞をすべて1回の授業で導入する場合と、②「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」とその待遇表現を区別しそれぞれ1回の授業でまとめて教える場合との2つのパターンがある。どちらも授受補助動詞を初級の後半あたりで1つのかたまりとして「体系的に」導入していると言える。

表2. 日本語の教科書における授受補助動詞の提出順序

教科書	授受補助動詞	導入の課
『みんなの日本語』	～てあげる・てくれる・てもらう	第24課
	～てくださる・ていただく	第41課
『総合日本語』	～てあげる・てくれる・てもらう	第18課
	～てさしあげる・てくださる・ていただく	第21課
『新編日本語』	3系列7形式	第2冊第7課
『新総合日本語』	3系列7形式	第23課

今回のCJTに対するインタビューでは、「教科書の提出順序に従って教えている」(CJT01³)といった回答が全員あったように、授受表現を一括して提示している日本語の教科書から強く影響を受けており、授受補助動詞を1課の中で体系的に導入している。

ただ、これまでの一括した日本語の教科書の提出順序に対し、疑問視する声(3a)があるほか、初回の授業では文構造の説明を中心とし、授受補助動詞構文の発話機能などについては、ほかの授業での「再確認」を期待したいという声(3b)も聞かれた。

- (3) a. 「セットで提示すると、学習者なりに授受表現の文型体系を作りやすくなるかもしれないが、学習の負担が大きくなるし、学習効果はそれほどよくないと思う。」

(CJT03)

- b. 「適切に使えるようになるには、「聴解」や「会話」などの授業で「使用場面」を再確認することはどうしても必要だと思う。」(CJT06)

そして、教科書の提出順序に従っているものの、表3に示すように、1回の授業の中で

常に2つの異なる授受補助動詞構文を対比的に教えており、教え方に工夫する動きが見られた。例えば、「～てあげる」と「～てくれる」は同じ中国語の「给…」に訳される場合が多いが、文の主語や「给…」の動作の対象者が異なることを理解してもらう (CJT03) とったように、日中両言語における文の構造や言語形式に関する相違を活用する教え方もあれば、「依頼の場面を用いて「～てくれる・てもらう」をセットで導入する (CJT05)」というように、日本語の授受構文の発話機能を重視する教え方もある。今回のCJTには、「場面に即した授受表現の指導が重要だ (CJT06)」という考えに基づいて、後者の「～てくれる」と「～てもらう」をセットで教えることが主流となっていると考える。また、学習者の負担を考慮し、「～てさしあげる・てくださる・ていただく」といった待遇表現を、ほかの授受補助動詞と区別し、別の課で提出したほうがよい (CJT06)」との提案はほぼ共通した考えである。

表3. 1回の授業での授受補助動詞の提出順序及びその理由

教える順	理由
授受補助動詞 ～てやる/あげる ↓ ～てくれる ↓ ～てもらう	<ul style="list-style-type: none"> ・「～てあげる」と「～てくれる」は同じ「给…」に訳される場合が多いが、文の主語や「给…」の動作の対象者が異なることを理解してもらう (CJT03) ・「～てくれる」と「～てもらう」は視点の置き方が異なるが、依頼など共通した使用場面がある (CJT04)
待遇表現 ～てさしあげる ↓ ～てくださる/ていただく	<ul style="list-style-type: none"> ・目上の人や親しくない人に使えないことをよく理解してもらう (CJT02) / 取り扱わなくてもいい (CJT06) ・「感謝」「依頼」の場面によく使う定形表現として導入し定着できればいい (CJT01)

なお、「～テアゲル」系に関しては、場面に応じて適切に使うことが難しく、かつ、必須とはいええないことを理由に、これまでの研究では「初級では導入せず、中級以降に回すほうがよい (庵2011: 56)」や「「～てあげる」も教科書からはずした方がよい (田中2005: 64)」といった提案がされている。だが、今回のCJT 6人とも、(4)のような「～てあげる」を過剰に用いることによる不適切な使用が、運用上の問題点として意識されているものの、上述した提案と異なり、「親しい間柄でよく使う (CJT01)」とし教えるべきだと主張したうえ、「使用できる場面や相手を提示すること (CJT02, 06)」や、「～テアゲル」構文の使用場面とそこに見られる母語話者の対人意識や気持ちを考えさせ理解してもらうこと (CJT05)」といったように、教え方をもっと工夫すべきだという意見が強かった。

- (4) 場面：ホテルの案内係が、お客さんに対して述べる発話
「では、お部屋までお荷物を持ってあげましょうか。」

3.2 授受補助動詞構文の相違に関する説明について

授受補助動詞構文の相違に関する説明について、今回のCJTに対するインタビュー調査から、「助詞と文構造」「丁寧さ」「働きかけ性」との3つのキーワードが抽出された。

まず、初級段階では(5)のような授受補助動詞の文構造、特に行為の与え手と受け手の後に来る助詞と各授受補助動詞の対応関係が、最も重要視されている。

- | | | | |
|--------|---------|----------|----------------|
| (5) a. | 与え手(私)は | 受け手に | ～てやる/あげる/さしあげる |
| | (私は) | おじいちゃんに | 本を読んであげた。 |
| b. | 与え手は | 受け手(私)に | ～てくれる/くださる |
| | おじいさんは | (私に) | 絵本を買ってくれた。 |
| c. | 受け手は | 与え手(私)から | ～てもらう/いただく |
| | おじいさんは | (私に) | 絵本を読んでもらった。 |

また、「～てくれる」「～てくださる」といった同じ系列の中では、行為の与え手と受け手との「上下関係」により、まず両者を使い分けられるように(6)のような例文を提示するという。

- (6) a. これは 友達が 撮ってくれた写真です。
 b. これは 先生が 撮ってくださった写真です。(下線は筆者)(CJT02)

そして、系列間の違いについては、(7a)と(7b)の「～テアゲル」と「～テクレル」については、中国語訳からいうと、同じ「給…」になっているが、「給」の対象者(行為の受け手)が異なることが指導のポイント(CJT03)とし、授受行為の方向性による違いを学習者に意識させようとしていることが窺える。

- (7) a. 私は おじいちゃんに 本を読んであげた。
 (我^給爷爷读书/ 我读书^给爷爷听。) 私 → おじいちゃん
 b. おじいちゃんは 私に 本を読んでくれた。
 (爷爷读书^{给我}听。) おじいちゃん → 私

一方、「～テクレル」系と「～テモラウ」系の両者については、(8)のような交替可能な例に示すように、行為者の後の助詞と文末の授受補助動詞を対応させ、両者の互換性を有する形態に限定して教えられる傾向が見られた。両者の相違点は授動詞か受動詞かという語彙的意味および行為の与え手か受け手がガ格かニ格かという点のみ強調されている。

- (8) a. 李さんが自転車を修理してくれた。
 b. 李さんに自転車を修理してもらった。(CJT03)

では、「～てくれる」構文と「～てもらおう」構文における意味上の違いはどのように教えられているのであろうか。CJT に尋ねたところ、(9a) の依頼場面における丁寧さの度合い及び、(9b) の行為の与え手に対する働きかけ性の有無、といったような言及があったが、「学生に聞かれると説明しますが、ややこしいですから、授業内容としては教えない(CJT05, 06)」という。

- (9) a. 「両者の違いについては、例えば、依頼場面において、「鉛筆を貸してくれますか」と「鉛筆を貸してもらえますか(下線は筆者)」を例にすると、「～てもらおう」構文がやや丁寧な印象を与えることぐらいだ。」(CJT05)
 b. 「両者の違いについて授業中説明する必要はないと思う。するとしたら、中級後半で、「話し手が行為をするよう相手に頼んだ場合は「～テモラウ」を使うが、相手が自分から進んで行為をした場合はその人を主語にする「～テクレル」を使う」との説明を導入する。」(CJT06)

以上のことから、中国人日本語教師は、初級段階では助詞「にから」と各授受補助動詞の対応関係を明確化させ、主語と文構造による違いを理解させようと指導する傾向が窺える。また、行為の与え手と受け手との間の「上下関係」の差により、同じ系列内の授受補助動詞の違いを意識させている。そして、中級になっても、「～テクレル」と「～テモラウ」の互換性が強調されたまま、その相違について説明しない方針が強い。

3.3 使用場面と提示した例文について

授業中どのような例文を学習者に提示しているのかを把握し、その特徴を考察するため、まず、インタビュー調査では「授受補助動詞を使って、例文を自由に作成してください」と、調査協力者の6人に指示した。一人の教師が1つしか挙げていない場合もあれば、複数挙げた場合もある。提示された例文を、文構造を重視する相手との恩恵的な行為を聞き手に叙述する「述べ立て文」と、申し出や依頼、感謝といったその場における発話の表現意図を重視する「働きかけ文」に分け、表4にまとめた。

ここから分かるように、提示された例文は、「述べたて文」のほうが「働きかけ文」より多かった。3.1節で挙げた4冊の日本語の教科書において、第三者の関与する行為を聞き手に「叙述」する述べ立て文がより目立つという結果があったように、今回提示された例文は教科書の現状と合致しており、CJTは文型積み上げ式の教科書から影響を強く受け

ているといえよう。

表4. CJTに記述された例文(抜粋)

授受補助動詞	例文数		例(下線は筆者)
	述べ立て文	働きかけ文	
～テアゲル	12	0	a. 妹におもちゃを買ってあげた。(CJT01) b. 困ったおばさんを助けてあげた。(CJT02)
～テクレル	8	4	c. 友達は荷物を持ってくれた。(CJT03) d. 先生の部屋番号を教えてください。(CJT04)
～テモラウ	9	3	e. 漢字の読み方を教えてもらった。(CJT05) f. 明日の午前中来てもらえますか。(CJT06)

次に、「授受補助動詞を教える時、教科書にある例などは別として、どんな場面を学生たちに提示しますか。」という質問に対し、CJT 全員から、「～てあげる」は「申し出」や「第三者の授受行為を記述する場面」、「～てくれる」は「感謝」と「依頼」、「～てもらう」は「依頼」といった回答があった。つまり、述べ立て文ではなく、「～てくれて、ありがとう」や「～てもらえますか?」といった働きかけ文が多く用いられる場面である。表4に提示され例文とは、異なった回答があったのではなぜだろうか。「文法」の説明と「会話」の練習は乖離しているように見えるが、実際の教育現場では、正確な言語形式の習得にとどまるのではなく、少しずつ文の発話機能も重視し言語運用能力を促進するような練習を積極的に取り入れているのではないと思われる。

なお、孫(2011, 2013)の授受補助動詞の「産出レベル」に関する調査では、上述した述べ立て文と働きかけ文では、中国人学習者の習得状況がかなり異なることから、日本語教育では両者を分けて記述することが重要であると主張した。が、今回の調査では(9)のように「叙述」か「対話」の場面における「～テアゲル」の使用上・指導上の違いを意識している教師は1人いたが、実際の教育現場には導入されていないようである。

- (9) 「「～テアゲル」は恩着せがましさの問題があるから、対話の場面ではあまり使わないが、第三者の授受行為を記述する時、あるいは日記など文章を書く時、その問題はなくなると思う。ただ、このことは学生たちには説明してない。」(CJT02)

3.4 中国語対訳の活用法について

「どのような中国語訳を学習者に与えているのか」という質問に対し、「～テアゲル」系は主に「給…」(～に)「为…」(～のために)「替…」(～にかわって)、「～テクレル」系は「给(我)…」「为(我)…」(私のために)、「～テモラウ」系は使役を表す「请/让…」(～(さ)せる)といった共通した回答が得られた。これは、各教科書における授受補助動詞

の中国語訳と一致した結果である。そして、(10)のように、授受補助動詞の導入段階では、「給…（～てあげる・てくれる）」や、「请…（～てくれる・てもらう）」などの中国語訳を文型説明に活用すべきだという主張が強かった。

- (10) a. 「「～テアゲル」は最も理解されやすいから、先に導入する。その後、「給…」と「給（我）」による行為の与え手の違いから「～テクレル」を導入する。」(CJT06)
 b. 「導入段階では、できれば両言語の対応訳を活用したい。特に、中国語の「給」と「給（我）」はそれぞれ「～テアゲル」と「～テクレル」のかなりの部分をカバーできるから。」(CJT02)

ただ、「XガYニVテモラウ」構文については、(11a)のXがYに動作を依頼しその利益を受けることを表す「使役型テモラウ」構文の場合は、確かに中国語では依頼使役文「Xが请/让Y V」に近い意味で用いられることができるが、(11b)の依頼の意味のない受益文を中国語に訳す場合は、能動文、或いは「受ける+動作を表す名詞」の形の迂語的受動表現を用いる（井上 2011：40）。つまり、話し手の働きかけの意図のない「受動型てもらう」構文は、対応する訳はなく、中国語では授受補助動詞の先行動詞の動作主を主語にする能動文や、「被」や「受到」などを用いた受身文に訳される。そして、「～テクレル」に置き換えが可能なのは(11b)の「受動型テモラウ」のみである。ここで指摘しておきたいのは、今回のCJTが前述したように、「～テクレル」と「～テモラウ」の互換性を強調するあまり、両者の相違に関する説明が足りないことである。

- (11) a. 次にワン先生にごあいさつをしていただきます。／下面请王老师讲几句话。
 b. 私は先生に作文を褒めてもらった。
 ／老师表扬了我的作文。(先生が私の作文を褒めてくださった。)
 ／我的作文受到了老师的表扬。(私の作文は先生に褒められた。) (井上 2011)

なお、中国語感覚で理解させやすいのは、「～テアゲル」→「～テクレル」→「～テモラウ」の順であるとCJTが考えていることが分かった。その理由は、「動作主を主語にする文は、中国人学習者には理解されやすい(CJT06)」からであるという。

3.5 「恩恵・利益」の基本的な意味機能以外の用法について

日本語の授受補助動詞は、「だれかの恩恵・利益となる行為」を表す基本的な意味機能以外に、(12)のような授受を構成する要素が抽象化することによって派生する意味機能がある。インタビュー調査の最後に、これらの「派生的な意味機能」を持つ授受補助動詞の用法について、授業の中で導入するかどうかを聞いた。

- (12) a. おれの顔によくも泥を塗ってくれたな。
b. そんなところに突っ立つてもらつては困るんだよ。
c. ここで二酸化炭素を加えてやると、反応が早く進みます。(庵ほか 2001)

今回の中国人教師6人は、初中級段階で「恩恵・利益」基本的な意味機能以外の用法を「被害・不利益」を表す用法として理解している一方、ほぼ共通して授業中にそれらの用法を導入しないという認識を持っている。その理由は、「使用頻度が少ない(CJT02)」ことが多く挙げられている。

ただ、(13a)の決意や強い意志を表す「～てやる」の意味用法は、CJTの6人とも授受補助動詞と関係なく、「1つの表現(CJT01)」または「1つの文型(CJT02)」として教えているという。また、CJT06のみであるが、(13b,c)のような「非被害・不利益」を表す「～てやる」構文と「～てくれる」構文は、「定型表現として授業に取り入れ、理解できればいい(CJT06)」と述べている。

- (13) a. 今回の日本語能力試験、絶対合格してやる！(CJT02)
b. 頭にきたので、殴つてやった。(CJT06)
c. とんでもないことをしてくれたね。(CJT06) (下線は筆者)

総じて、「派生的な意味機能」を持つ授受補助動詞の用法は、基本的に授業に導入しないとの教授方針が窺える。また、少数であるが、導入する場合は、「合格してやる」や「殴つてやる」、「とんでもないことしてくれた」などのように、定型表現として授業に取り入れ、「理解レベル」の説明に留まっている。

4. 終わりに

本稿では、中国人日本語教師による日本語の授受補助動詞の指導方略を明らかにするため、CJTの6人に半構造化インタビューを実施した。その結果を整理すると下記のようにまとめられる。

1) CJTによる授受補助動詞の提出順序については、教科書通りに1課の中で3系列の授受補助動詞を「体系的に導入する」方針から、指導する際の「授受補助動詞の解体」を目指し、例えば、「～テアゲル」を導入してから、「～テクレル・テモラウ」をセットで教えようとする方針への変更が窺える。

2) 授受補助動詞構文をいかにして感謝や依頼といった具体的な発話場面と結びつけて学習者に示すかが重要視されつつあるが、授受補助動詞構文の文法的意味や言語形式の習

得に最大の関心を払っている。

3) 授受補助動詞の導入段階では、「给…」や「请/让…」などの中国語訳を文型説明に活用しているが、両言語における授受表現の相違点に関する解釈が足りない。

4) 「恩恵・利益」以外の派生的な意味機能を持つ授受補助動詞の用法は、話し手の決意や強い意志を表す「～てやる」を除くほか、中級になっても基本的に授業に導入してない方針が強い。

以下では、上述した調査の結果を踏まえ、日本語教育への提言を考える。

まず、授受補助動詞の提出順序について考える。従来、学習者に恩恵的な行為の授受を表す3系列の言語形式を比較させ、わかりやすく習得させようという狙いのもと、授受補助動詞及びその待遇表現を体系的に導入されてきているが、学習者の実際の習得状況を考察すると、行為者が主語に立つ「～てあげる」構文から「～てくれる」構文へ、次に行為の受け手が主語に立つ「～てもらう」構文へと進んでいる(田中 2005、孫 2013)。それで、ここでは従来一括して導入される授受補助動詞を解体し、一番習得されやすい行為の与え手を主語とする「～てあげる」構文を先に教え、その後、「～てくれる」構文から、「～てもらう」構文へと導入することを提案する。「～てあげる」をより先に導入することにより、まず、日本語初級学習者に物の授受を表す授受本動詞と行為の授受を表す授受補助動詞との違いを意識させ、次は、日本語の特徴とされる授受構文全体の「恩恵性」「方向性」「視点」「ウチとソトの関係性」などといった意味機能を理解させる。なお、「～てさしあげる」や「～ていただく」といった待遇表現は、中級にまわすとよいであろう。

次に、文機能を重視した教室活動の展開の可能性及び必要性について考える。初級後半から授受補助動詞構文の学習を始める時期は、文の文法的意味や言語形式の習得に最大の関心を払いつつも、コミュニケーション上の働き、即ち発話の意味内容や表現意図などの機能上の役割にも焦点を当てた指導も可能であり、そのような指導こそ求められるべきであると考えられる。しかも、単なる授受補助動詞構文の文型練習の積み重ねだけで現実場面での応用力を養うことは難しく、授受補助動詞の語用論的機能は日本語教育の中で十分配慮されていないことが冒頭で挙げたような学習者の不適切な発話を誘発していると思われる。そのため、文型をいかにして具体的な場面と結びつけて示すかが重要になってくる。つまり、授受補助動詞構文の言語構造を十分に理解すると同時に、感謝や、依頼、申し出などの場面における言語運用能力を促進するような練習を積極的に取り入れていくことが肝要であろう。

それから、冒頭で挙げた(2)のような語用論的な誤りをなくすには、日中両言語における事態把握の仕方に傾向的な違いがあることを学習者に理解してもらう必要があると思われる。そのため、初級文法項目の学習を終えた中級学習者を対象に、授受補助動詞の指導を行う際に、日本語の話し手の立場から物事を捉える「話者中心性」と、第三者の行為

に対しても話し手の価値判断を付与する主観性の強さという「立場志向性」の二つの特徴(大塚1995:283)を、中国語の「事実志向性」と比較しながら行うなど、指導方法の工夫改善を図ることが求められる。例えば、両者の違いを示しながら、日本語でより自然な表現の仕方を学習者に提示していくのは一つの方法であろう。残念ながら、このような認知言語学的観点を取り入れた日本語の教科書はまだ少ない。

最後に、授受補助動詞の使用実態に関する調査、日本語の教科書に関する分析、及び上述した日本語教師へのインタビュー調査の結果を踏まえ、授受補助動詞の適切な運用を目指す教案作りが必要であり、これを今後の課題としたい。

【注】

1. 本稿では、「～テアゲル」系は「～やる」「～てあげる」「～てさしあげる」の3つの形式の総称であり、カタカナ表記にする。一方、具体的に1つの形式を記述する場合は、これと区別し、「～てあげる」のように平仮名表記にする。
2. 日本語の教科書：①スリエーネットワーク(2004)『みんなの日本語(本冊)』初級IⅡ中級IⅡ 外語教学及研究出版社、②彭広陸・守屋三千代ほか(2005)『総合日本語』I～IV 北京大学出版社、③周平・陳小芬(2009)『新編日本語』I～IV 上海外語教育出版社、④李篠平ほか(2009)『新総合日本語(基礎日本語)』I～IV 大連理工大学出版社
3. インタビューは中国語で行い、和訳は筆者による。「CJT01」は表1に示す調査協力者の番号である。

【参考文献】

- 庵 功雄(2011)「日本語教育から見たやりもらい表現(特集 やりもらいの日本語学)」『日本語学』30(11), pp.50-58. 明治書院.
- 井上 優(2011)「日本語・韓国語・中国語の「動詞+授受動詞」(特集 やりもらいの日本語学)」『日本語学』30(11), pp.38-48. 明治書院.
- 大塚 純子(1995)「中上級日本語学習者の視点表現の発達について—立場志向文を中心に」『言語文化と日本語教育』9, pp.281-292. お茶の水女子大学.
- 蒲谷 宏(2001)「日本語教育で授受動詞をどう教えるか(特集 「授受」の言語学)」『言語』30(5), pp.52-53. 大修館書店.
- 孫 成志(2011)「中国人学習者による「～テアゲル」系の授受表現の使用と習得について—日本語母語話者との比較を通して」『日本語・日本文化研究』21, pp.95-108. 大阪大学大学院言語文化研究科.
- 孫 成志(2012)「「～てあげる」構文に見られる対人意識に関する考察—映画・ドラマにおける使用例の分析から」『日本研究論集』4, pp.93-109. チュラーロンコーン大学・大阪大学.

- 孫 成志 (2013) 「「～テクレル」と「～テモラウ」系の授受補助動詞の使用と習得」『日本語／日本語教育研究』4, pp.57-73. ココ出版.
- 田中 真理 (2005) 「学習者の習得を考慮した日本語教育文法」野田尚史 (編) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』, pp.63-80. くろしお出版.
- 中川 良雄 (1994) 「シラバスと日本語教科書 (Ⅲ) 日本語教科書における授受補助動詞文の扱い」『研究論叢』43, pp.221-234. 京都外国語大学.
- 堀口 純子 (1983) 「授受表現にかかわる誤りの分析」『日本語教育』52, pp.91-103. 日本語教育学会.
- 宮岸 哲也 (2012) 「シンハラ人日本語教師による授受補助動詞の指導について」『国語国文論集』42, pp.19-31. 安田女子大学日本文学会.
- 山田 敏弘 (2004) 『日本語のベネファクティブー「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法』 明治書院.